

2024 年度

2/1 入学試験

国 語

注 意

1. 試験開始の合図があるまで、この冊子の中を見てはいけません。
2. 放送の指示にしたがって、問題冊子に受験番号・氏名を記入します。
次に、解答用紙の指定された場所にQRコードシールをはり、受験番号・氏名を記入します。
3. 試験時間は45分です。
4. 問題は、1ページから16ページまで印刷してあります。試験が始まったら最初に確認し、足りないページがあったら申し出てください。
5. 答えはすべて解答用紙に記入してください。
6. 試験が終わった後、問題冊子・解答用紙とも回収します。
7. 記述問題では、指定された字数の8割以上は書いてください。ぬき出し問題では、指定された字数で答えてください。どちらの場合も、句読点やかぎかっこなどの記号も字数にふくまれます。

共立女子中学校

受 験 番 号	氏 名
A	

1 次の1～8の——線をつけたカタカナを漢字で、漢字の読みをひらがなで書きなさい。

1 子どもの権利とともに、児童ケンショウについて学ぶ。

2 自分の無力さをツウカンした。

3 彼女はサイチにたけた人だ。

4 アクセン身につかずというのだから、こつこつ働こう。

5 彼はこの戦いにマクを引きたいようだ。

6 簡単なものから取り組むのが定石だ。

7 言語道断なふるまいを見かねて注意した。

8 夜目にも美しさの分かる花だった。

② 次の1～5の()には色を表す言葉が入りますが、それぞれ色彩しきさい以外の意味で用いられています。()にあてはまることばをひらがなで書きなさい。ただし、すべて別の色が入るものとします。

1 彼は() だと思う。第一、理由がないよ。

2 彼はまだ() ね。これからが楽しみだが。

3 病氣予防のために() はだかにされた樹木。

4 () の黒髪くろかみが印象的な女性。

5 () 声を出して、応援おうえんをしている。

③ 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

随分前に『微苦笑俳句コレクション』江國滋編著（実業之日本社）で読んだ句の中に、こういう作品がありました。作者は、江隈順子さん。

卒業歌あの先生が泣いてはる

印象が強い。なぜか。

编者江國氏は《べつにどうということもない句だが、「あの先生」の「あの」がいい》といます。しかし、わたしには《あの》も、別に《どうということはない》ものに思えたのです。では、①どこに魅かれたのかというと、《は》です。

《い》ではない、という一点です。

仮にこれが《卒業歌あの先生が泣いている》だったら、ただのつぶやきです。文字にする意味もない。

ところが、《泣いてはる》は、いわゆる共通語ではありません。それを使ったことによって、通常の卒業式のそれとは違う、柔らかな空気に辺りが包まれます。

内容からいっても当然そうですが、この調子だけでも、《泣いてはる》と想ったのは女学生でしょう。普段は活発な子かも知れないが、卒業式という場であるだけに、いささか、おとなしくなっている。しかし、泣いてはいません。

その瞳に、豪快そのもののような男の先生——生徒指導などを担当して、三年間、煙ったがられて来たような先生の姿が映る。彼の無精髭の似合いそうな頬に、一筋の涙が伝っている。そういう情景が浮かびました。

《男》というのは、見ている主体が女学生ですから、それと比べた時、《秤の向こう側に置かれるのはより対照的な存在であるべきだ》と感じたからでしょう。実際には直観なので、理屈は後から追いかけたものです。

とにかく、《卒業歌あの先生が泣いている》なら、それだけで終わってしまうものが、一字替えただけで、きちんと一つの空間を作っている。関西弁の力を感じます。わたしには、そこが印象深かったのです。

江國氏は、《ふだん、生徒から鬼のように恐れられている、きびしいだけの女性教師だろう》といます。それがまた面白くて、人に会った時、

「この先生は、どんな人だと思います？」

という問いを投げかけると、思いは様々。男説、女説、それそれぞれがありました。ところが、最近、ある女の方が、②A について ②B 説を唱えたのです。まったく考えてもいなかったので、びっくりしました。

どういうわけで、そう思うかという点、

《女性が卒業式などで注—センチメンタルになる》というのは、一方的な思い込みで、むしろ、そういう時には、冷静なのだそう。教師が、鬼の目にも涙を見せたぐらいでは《泣いてはる……》とはならない。《泣いてはる》はあっても、《……》の部分はない、とおっしゃる。むしろ、そういう、よくいえば純情、悪くいえば単純な反応は男に似合う、という説でした。

さあ、そうなると、男も《泣いてはる》というのだろうか、と思いました。確かに、上方落語などを聴くと、男性の登場人

物も《居てはりますかあ?》などといいいます。辞書を見ると、関西弁の《はる》は、尊敬、まれに丁寧とありました。となれば、面と向かっていうのならともかく、内面の思いなら、男とは感じられません。《先生、泣いてるぞ!》というのが、男の心の言葉でしょう。《泣いていらっしやる!》とは思わない。

とにかく、こうなったら、現地の方に確かめるのが一番だと思つて、大阪の有栖川有栖さんに電話しました。

事情を手短かに説明して、うかがうと、

「泣いてはる」——なら、男もいうでしょうねえ。ただ、普通には、《泣いとる》かなあ」といふご返事。

「泣いとる」は、女は使いませんか」

「いや、使います。男言葉というなら、《泣いとる》とか、《泣いとるで》でしょうね」

「はあ」

「しかし、そうになると、好感を持ったいい方ではありません。《あの先生が泣いとるで》となったら、《いつも、偉そうなこといつとるあの注²先公が泣いてやがるぜ。けっ!》といった感じですね」
「そうですか。《泣いてはる》だと、物柔らかな感じがするんですけれどねえ」

そう、お話しして、受話器を置きました。

③ 夕方、今度は有栖川さんの方から電話がありました。これが、わたしには実に意外な電話だったので。

「もしもし、先程の件ですけれど」

「はい」

「あれ、うちのが帰って来たんで、聞いてみたんですよ。そうしたら、あの句の《生徒》ね——」

嬉しそうな声である。何だろう、と思う。

「はい?」

「——《男》だっていうんですよ」

二人目の、男子生徒出現である。

「どうしてまた?」

「いやあ、北村さん、さっき、《泣いている》から《泣いてはる》に一字替わったから、柔らかな世界になったとおっしゃったでしょう。黙って聞いてましたけど、我々だと、そうも思わないんですよ」

「は?」

「つまり、関西に住んでたら、《はる》は当たり前なんです。普通にしゃべってる言葉ですから。つまり、北村さんのいう《卒業歌あの先生が泣いている》と同じ語感なんです」

これには、虚をつかれた。

「女生徒が《あ、あの先生が……》と思うんじゃあ、当たり前過ぎるというんですよ。それなのに、わざわざ句になっている。ということは、ちよつと斜に構えているんじゃないか。そこで、《おいおい、あいつが泣いてるぜ》という気持ちで《泣いてはる》。だから、男じゃないかというんです」

「なるほど」

「うちのは京都に知り合いが多いんですが、京都は大阪より、《はる》に敬語の度合いが少ないらしいです。《泣いてはる》といったのが男でも、全く不自然ではないそうです」

狭い日本です。しかし、どこに住んでいるかで、言葉の感じ方にも、これだけの差が出て来るのだと、改めて感じ入りました。詩は翻訳不可能といわれますが、同様の問題が国内でも起こり得るわけです。

この句に関していうなら、作者が仮に関西在住の方でも、まず、《共通語で作る》という前提があると思います。その上で生まれた《卒業歌あの先生が泣いてはる》でしょう。だから、作品なのだと思います。

地方の言語で書かれた詩や文章には、その響き、香りで、ま

ず我々を衝つものがあります。それだけの生々しい生命力が、言葉にあります。それは間違いないことだと思います。しかしここで、共通語を知らず、その言語だけで育った人の耳に、心に、それがどう響くのか——ということを考えました。④ それ

注1 センチメンタル Ⅱ 感じやすく涙もろいさま

(北村 薫『詩歌のまちいせ』ちくま文庫による)

注2 先公 Ⅱ 先生を軽んじた言い方

1 ——— 線① 「どこに魅かれたのかというと、『は』です」とありますが、これは筆者がどう感じたということですか。ふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア むせび泣く豪快な男の先生の様子を、より切実に表現できている。

イ 先生への三年間の感謝の念を、心のつぶやきとして見事に表している。

ウ 張りつめた空気の中で発見した先生の意外な人からの温かさを感じている。

エ 何気ない景色の中で、先生を見る目が変わっていく様がありありとえがかれている。

オ 「泣いている」では表現しきれなかった細やかな感情が、関西弁によって表現できている。

2 ②A と ②B にあてはまることはの組み合わせとしてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア A 泣いている先生・B 男性 イ A 泣いている先生・B 女性 ウ A 見ている生徒・B 男子

エ A 見ている生徒・B 女子 オ A 《泣いてはる》・B 共通語

3 ——— 線③ 「夕方、今度は有栖川さんの方から電話がありました」とありますが、これはなぜだと考えられますか。ふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア 《泣いてはる》に物柔らかな感じをいだし、女子生徒の視点であると考えている筆者に、新しい見方を提案できることが喜ばしいから

イ 男なのか女なのかかわからずに根拠を探している筆者に、正解を示すことでようやく鼻をあかすことができると思ったから

ウ 妻には京都に知り合いが多くいることに気づき、帰ってきたところですぐに確認をしてみようと考えたから

エ 男が《泣いてはる》と言うかどうかについて、自分でも自信がなかったが、妻の話を聞いて、筆者の考えを改めてもらえると確信したから

オ 普段から使っている関西弁の表現について、改めて筆者から問われてみたことで、物腰柔らかい関西弁の良さを再発見してきたから

④ 次の文章は、「私」と祖母が、列車の旅から滞在先のホテルに戻った場面です。「私」は祖母のために入浴の準備をしますが、祖母はベッドに直行してしまいます。これを読み、後の問いに答えなさい。

「お化粧を落としてちょうだい」
ええー？ ベッドの上で？」

「さすがにそれは、洗面所で顔を洗ってもらわないと」と言った私を、祖母はむしる。①物知らずに対する哀れみの目で見上げてきます。

なんだなんだ、私、何かおかしなこと言った？

すると祖母、本当に面倒臭そうに十センチくらい右手を挙げてバスルームのほうを指さしました。

「あそこにコールドクリームがあるから、持ってきてちょうだい」

はて、コールドクリームとは？

よくわかりませんが、言われるがままに洗面台の周囲にスラリと並べられた祖母の化粧品を漁ると、なるほど、円筒形の小さな容器に「コールドクリーム」と書かれています。

蓋を開けて匂いを嗅いでみると、おお、戦前女子の香り。

容器もかなり昭和みの漲るデザインで、過ぎ去りし時代を感じさせるアイテムです。

こんなの今どき、どこで買うんだい……と首を傾げながら、私は祖母の待つベッドに、よいしょと上がって胡座を掻こう……として、自分自身はまだスーツ姿だったことを思い出し、お上品に座りました。

「あつたよー。これ、冷たいクリームなの？」

「クリームはだいたい冷たいでしょう。それを顔にたっぷり塗って、マッサージュしてちょうだい。白粉が全部落ちるように」

「ほうほう……？ つまりこれはクレンジングクリームなのね？」

言われるがままに、私はクリームを指にたっぷり取ると（まあまあ冷たかったです）、祖母のほったに小さな山を作ってから、顔全体に塗り広げ始めました。

何だか、②奇妙な感覚です。

思えば、赤ん坊の頃はいざしらず、物心ついてから、祖母の顔に触れる機会など一度もありませんでした。

この旅に出るからは、色々な場面の介助で手や腕に触れることはあったものの、顔は本当に、人生初タッチの心境です。

祖母の頬の皮膚はいやにひんやりしていて、とても薄く、柔らかく、そのくせハリがなくて、何だか……そう、温めた牛乳の上に張る膜のような感触でした。

あの膜と違うのは、指先にまとわりついてこないこと。

クリームを丹念に塗り、ファンデーションが落ちるよう、指先でくるくるとマッサージュしていても、人間の皮膚というよりは繊細なシートを擦っているような感じで、どうにも落ち着きません。

「こんな感じでええの？」

不安になって訊ねてみると、祖母はやはり目をつぶったままで、「もつと丁寧に、隅々まで。白粉が残らないようにね」と敵しい口調で言いました。

「はー。ちゃんとしてるねえ。私なんて、疲れてるときは、使い捨ての化粧落としシートでシャツシャツと拭いて寝ちゃうよ」

祖母の人の荒さに少し呆れながら私がそう言うと、祖母のほうは、もつと呆れた声で言い返してきます。

「そういうことをしていると、あとで後悔するわよ。私なんか、若い頃はお湯を使うたび、^{注1}ぬか袋で全身を丹念に擦ったもんです。だから今も綺麗でしょう」

③ いやもう本当に。

この旅を始めてからずっと、祖母のこの漲る自信というか、自己肯定感の高さというか、そういうものが眩しくて不思議でたまらない私は、思わず彼女に訊ねてしまいました。

「どうして？」

「どうしてかは知らないけど、ぬかで擦ると肌が白くきめ細やかになるって、私の母が」

「ああいや、それは聞いたことがあるし、実際、お祖母ちゃんは今でも色白だけど、^④そっちじゃなくて」

「どっちなの」

「どうしてお祖母ちゃんはいつも自信満々でいられるのかなーって。絶対、迷わないやん？ いつも断言するし、自分のことをそうやって美人だと思ってるし。凄い才能だと思うんだよね。そのつよつよ遺伝子、引き継ぎたかったわ」

祖母はやっぱり、私に顔をうにうにと擦られつつ、「もつとこのあたりを丁寧に」と言わんばかりに目元を指さしながら、さも当然といった口調で答えました。

「私はねえ、自分を生まれながらの美人だと思ったことはないの。だからこそ娘時代から、美しくなろうと努力したわけ。お肌が白くなるよう磨いて、お化粧を工夫して、髪型も着るものも、自分に似合うものを研究して」

「それは凄く偉いけど、努力したって、実るとは限らへんやん？」

「努力しなければゼロのままだけど、百も努力すれば、一か二にはなるでしょう。一でも違いは出るものよ」

「そんなもんかなあ。^⑤骨折り損の……って感じがするけど」

「あんたはそうやって、最初から諦めているから不細工さんのまま。ゼロどころか、日焼けして、お手入れをさぼって、お洒落もしないで、マイナス五にも十にもなってしまってるんだと違いませんか？」

「ウツ」

思わず、喉というよりみぞおちのあたりから、変な声が出ました。

祖母の尻を擦る指に、つい力がこもります。

「あんた自身が、本当にそれで構わないと思ってるんならいいけれども、そうと違うでしょう。人の目も気になる、自分でも気になる、美人に生まれた他人様が羨ましい」

「うう」

もはや返事というより呻き声ですが、祖母は、私の注2コンプレックスなどお見通しだったようです。

「それなのに何もしないのは、自分を見捨てて痛めつけてるようなもんよ。それで綺麗になれるはずがないわ。鏡を見て、ああ、昨日の自分より少しだけ美人だわ、って嬉しく楽しくなれるように、少しでも努力してみたらどうなの」

「ぐう」

「もつと綺麗になれる、もつと上手になれる、もつと賢くなれる。自分を信じて努力して、その結果生まれるのが、自信よ」

祖母の言葉には少しの澁みもなく、でも同時に、驕りもありませんでした。

家事にも育児にも趣味にも努力を惜しまなかった、そんな自

分自身への信頼と尊敬が、祖母のあの堂々とした態度の源だったようです。

そりや羨んでいるだけで身につくものでも、DNAで受け継げるものでもないわ。

むしろ、これまで祖母の態度を、、なんて思っていた自分が恥ずかしいわ。

謎でも何でもなかった祖母の自信の根拠と理由を知って、感嘆と自己嫌悪で言葉を失った私に、祖母はツケツケと命じました。

「もういいから、熱いタオルを作ってきて、綺麗に拭いてちょうだい」

あ、そういうタイプの化粧落としますか。なるほど。

洗面所で熱いお湯を出してフェイスタオルを濡らして絞り、その蒸しタオルをしばらく顔に乗せてパックしてから、コールドクリームを拭き取っていくと、現れた祖母の素肌は、シワがあっても、ハリがなくても、ピカピカでした。

自分の長年の努力の賜であるこの肌を、祖母は誇りに思い、

注1 ぬか袋 Ⅱ 布の袋に米かすを入れ、石けん代わりにしたもの

注2 コンプレックス Ⅱ おとっているという意識のこと

注3 スッピン Ⅱ 化粧をしていない状態

――線①「物知らずに対する哀れみの目で見上げてきます」とありますが、なぜだと考えられますか。ふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア 疲れている祖母をいたわることのできない「私」の冷たい反応を残念に思ったから

イ 祖母の願いを素直に聞こうとしない「私」の反抗的な態度をせつなく感じたから

ウ 若い頃がんびり屋だった祖母からすると「私」の甘えた言動は見るに耐えられないものだから

エ 年をとった祖母に対して孝行しない非常識な「私」の様子にしつけの至らなさを感じたから

オ 女性の身だしなみのことをまるでわかっていない「私」の様子を見て嘆かわしく感じたから

美しいと心から感じているのだなあ、と納得できるほどに。

「確かに、お祖母ちゃんは何でも全力投入やもんなあ……。」

そうか、だから、⑦ 全方位自信があるんや」

「そうよ。自信なんて、ないよりはあったほうがいいでしょう」

「そらそやわ。売るほどあったほうがええわ」

「まだ若いんだから、今からでももっと努力しなさい。色んなことに」

「はあい」

ようやく目を開けた祖母と見つめ合って、⑧ 私はこの旅行で

初めて、自分の顔に心からの笑みが浮かぶのを感じました。

祖母も輝く注3 スッピンで笑っていました。

なんだろう。

今思い出しても、ちよつと涙ぐんでしまいます。

私が祖母と、率直に心をさらけ出して長い話をしたのは、あの夜が最初で最後でした。

(榎野道流『祖母姫』、ロンドンへ行く！』小学館による)

2 ———線②「奇妙な感覚」とありますが、そのような感覚を起こさせたものを作者は何にたとえていますか。十一字で探し、はじめと終わりの二字をそのまま書きぬきなさい。

3 ———線③「いやもう本当に」とありますが、そのときの「私」の心情としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。
 ア 祖母の人の荒さにいや気がさしている。
 イ 誰もが認める祖母の美しさに感心している。
 ウ 祖母の強い説得力に対して圧倒あつぱされている。
 エ ぬかで肌が綺麗になる効果に納得している。
 オ 化粧の落とし方について後悔し始めている。

4 ———線④「そっちじゃなくて」とありますが、それはどういうことですか。「私」の考えを次の()にあてはまるかたちにして、Aを十字程度、Bを二十字程度で書きなさい。

私は、(A 十字程度) ことではなく、(B 二十字程度) ことに対して興味を持っているのだということ。

(下書き用)

B			A	
			ことではなく、	
いこと……				
	16			8

5 —線⑤「骨折り損の……」とありますが、文章中での意味をよく考えて、これと同じような意味を持つことわざを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア 猿も木から落ちる イ 虫が好かない ウ かんこ鳥が鳴く エ 犬の尾を食うて回る オ 立つ鳥跡をにごさず

6 ⑥ にあてはまる「私」の気持ちとしてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア 不思議やなあ、羨ましいなあ
イ 偉そうやなあ、謎の自信やなあ
ウ もう年やなあ、かなわんなあ
エ いい気なもんやなあ、幸せやなあ
オ きついなあ、しんどいなあ

7 —線⑦「全方位自信がある」とありますが、その「自信」は何から生まれたものですか。三十五字以上四十字以内で探し、はじめと終わりの三字を書きぬきなさい。

8 —線⑧「私はこの旅行で初めて、自分の顔に心からの笑みが浮かぶのを感じました」とありますが、「私」がそう感じているのはなぜですか。その理由としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア コンプレックスとうまく向き合えず、他人を羨んできた自分の気持ちを祖母が理解していたことを知るとともに、努力によって自信へと変えてきた祖母の生き方に感銘を受けて、祖母と心がふれあつたように感じられたから

イ これまでは、自分と違って自己肯定感の強い祖母に距離感をいだいていたが、今こそ堂々としている祖母も長年コンプレックスになやんできたことを知って、強気な振るまいをする態度にかえって人間味を感じるようになったから

ウ 祖母のはげましによって、もっと綺麗になれる、もっと上手になれる、もっと賢くなれると思いきおことさえできれば、自分のことを誇りに思い美しいと感じられるようになるということが分かって、未来への希望が持てたから

エ 人使いが荒く偉そうだと思ってきた祖母にも欠点があったと知って親近感がわき、何もしい自分を責めているように感じてきた祖母の言葉に、実際は少しの澱みも驕りもなかったということに気づいて心がすっきりしたから

オ はじめは世代間ギャップを感じずにはいられなかった祖母が、綺麗になりたい気持ちを持って努力してきた一人のけなげな女性だったと分かり、いつの時代も美しい容姿へのあこがれは変わらないと知って安心したから

⑤ 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

今の子供たちは何をして遊んでいるのか、と注目してみると、それはもう、みんなゲームである。大人にとっても、こんなに都合の良いおもちゃはない。部屋は散らからないし、塾へ行く合間の短い時間でも瞬発的に楽しめる。比較的安価な装置で長く遊んでいられるから注コストパフォーマンスも良好。また、これを生産する側も、ハードとソフトの開発を分担できるし、一度開発すれば、ソフトのコピーは非常に楽だ。大量に同じものを作れば大儲けにつながる。

この種のゲームというのは、それがなかった時代には、みんなが夢見ていた「おもちゃ」の理想形だった。そこには、あらゆる「遊び」の要素がある。「楽しさ」を抽出して共有することができる。たとえば、ラジコン飛行機を作るのは、それを飛ばすときの楽しさを夢見ているわけだが、ゲームソフトで飛行機の操縦ができるならば、面倒な工作をする必要もないし、またせっかく作った機体を壊してしまう危険もない。自動車のレースだってできるから、もう模型のレーシングカーを作る必要もない。それどころか、釣りにいく必要もないし、スキューバ・ダイビングをする必要もないし、ペットを飼う必要もなくなる。いろいろな楽しさをゲームはソフト的に再現してくれる。面倒な手続きを飛び越えて、手軽に面白い部分だけをいきなり体験できるのだ。

ゲームの適用範囲は、「遊び」だけに留まらないだろう。仕事や恋愛、そして人生そのものまで、取り込む勢いである。現にそういったゲームがつきつきに開発され、どんどんリアルになっている。この仮想世界に足を踏み入れれば、本当にリスクなしに楽しさだけを味わうことができる。実に素晴らしい。

しかも、ゲームの消費者にとってのメリットだけでなく、ゲームを作る側のメリットも非常に大きい。さきほども書いたように、開発や生産に向いているからだ。開発者は、コンピュータに向かってプログラムをすることに集中できる。一度作ったものは、その後の開発のための蓄積となる。外部に向ける目としては、どのように現実を再現すれば良いのか、というその一点にのみ頭を使えば良い。

その昔、これに似た革命的なメディアとして社会に普及したのが「書物」である。書物はすべて「文章」というソフトで作られている。どのようなものも、書物で疑似体験ができる。読者は、本だけを手入れすれば、安全で手軽な楽しみが味わえる。作る側も、文章を書けば良いだけだし、大量に印刷することで、効率的な商売が成立する。① まったく同じである。

新しいメディアが登場すると、すべてが目新しいし、これまで存在したあらゆる「楽しさ」を採り入れるだけで、しばらくは商売になるだろう。

僕は、このゲームや書物という「疑似体験」の文化を否定するつもりはまったくない。これは豊かで平和な社会の象徴ともいえるし、これで楽しむ人生も素晴らしいと思う。特に、コンピュータを用いたゲームは応用範囲が格段に広いし、解像度が高いために破格のリアリティが実現できる。現実的体験の大部分を取り込むことも十分に可能だろう。けれど、別の見方をすれば、結局

はこの「広く高い」能力だけの違いであって、本質的に新しいものが生まれただけではない、という点に注意をした方が良い。

最大の革新は、技術によって製品が「安く」なったこと。ようするに、大衆が動くのはこれのためだ。そして、みんながその文化に染まる。安いものはすべてを凌駕するだろう。さて、失われたものとは、何か？

注4 トランジスタが登場したときには、注5 真空管の存在理由がなくなってしまう。そういった技術革新はいつの時代にもあるものだ。そこでは、新しい技術によって、古い技術が失われる。

たとえば、昔の電化製品のスイッチには、指で押すと引っ込むタイプのボタンがあった。もう一度押すと、バネで戻る。それは機械的な仕組みで成り立っていた。扇風機のスイッチは、「1」を押せばファンが回り、「0」を押せば「1」のボタンは戻ってファンが止まる。ほかに、ファンのスピードを変える「2」や「3」のボタンがある。さて、この仕組みを貴方は想像できるだろうか？一度押せばロックし、どれかを押せば、今まで押されていたものが戻る。これらのスイッチはどんな機構で実現されているのか？今では、この種のスイッチはほとんど使われない。手応えのないスイッチになった。指で触れるとそれを感じず。ロックしたり、戻ったりしないで、ソフト的に状態を記憶している。ロックする代わりに、注6 発光ダイオードのランプが点灯するようになっている。また、スイッチが沢山並ぶような装置では、スイッチ自体がタッチパネルに取り込まれ、必要なスイッチだけを表示するようになった。Phoneなどが良い例である。

④ もっと身近な例として想像してみよう。たとえばの話である。

家の窓は、開け閉めをしなければならない。蝶番やレールなどの工夫から、防水のための注7 パッキングまで、機械的機構が面倒だ。さらに、光を採り入れるためにガラスを利用し、逆に遮るために、ブラインドやカーテンが付随する。最近では、断熱のために二重ガラスを使ったり、防犯のために割れにくいガラスが工夫されている。

⑤ これほど面倒ならば、窓なんか作らないで、窓の代わりに液晶モニタを壁に取り付けておけば良いではないか。ビデオカメラで撮影した外の風景をモニタに表示すれば、「外が見える」ことになるし、光も採り入れられる。また、通気は換気扇やエアコンがあれば充分だ。断熱的にも有利になるし、なによりインテリアの自由度が高くなる。窓の位置だって、いつでも簡単に変更できるのだ。

⑥ おそらく、将来はこんなことは当たり前になるだろう。「え、窓がないのお？それはちよつとなあ」と
既存の窓の文化に親しんでいるからであって、明らかに「古い感覚」なのではないか。

この場合、窓が液晶モニタになってしまったことで、ガラスやブラインドという文化は失われる。それは注8 ノスタルジイだ。

しかし、窓を開け閉めしてきた世代であれば、レールが引っかかる感覚とか、木枠が雨で変形して開け閉めが固くなる経験とか、そういった無意識に持っていた技術的センスが、デジタル窓の世代の人たちには「想像もできない」ものになるのだ。レールさえあれば軽くスライドするはずだ。正確な寸法に作れば水は漏れないはずだ、という技術者ばかりになるかもしれない。本書で取り

上げたい問題とは、この実にささやかな部分なのである。

これは、「ほんのちよつとしたこと」かもしれないが、「どうでも良いこと」ではないはずだ。技術の現場においては、このほんのささやかな問題が、成功への大きな障害になる可能性があるし、またそれを「さつと」乗り越える能力が技術者には求められる。技術の現場に立ったことがあれば、これがよくわかるはずだ。言葉ではなかなか表されない問題なのだが、たとえば、「あの人に頼めば、なんとかなるだろう」といったように、個人の手に委ねられている能力である。何をどう考えて解決すれば良いのか、それは残念ながら注9 ケースバイケースなので文章化することは困難だ。解決法ではなく、解決する感覚の問題なのだ。注10 ノウハウではなくセンスなのである。

強いて⑦その核心を抽象するならば、こんなふうになるだろうか。

(森博嗣『創るセンス 工作の思考』集英社による)

注1 コストパフォーマンス Ⅱ かけた費用に対してどのような効果があるかということ

注2 メディア Ⅱ 情報を伝える手段

注3 凌駕 Ⅱ 他のものをおさえて上回る

注4 トランジスタ Ⅱ 電気の流れをコントロールする電子部品で、電気信号の増幅に優れている

注5 真空管 Ⅱ 中が真空になっているガラスの管で、電気信号を増幅するために用いる電子部品

注6 発光ダイオード Ⅱ LED、電気エネルギーを光に変える部品

注7 パッキング Ⅱ 液体などが漏れないようにすき間につめるもの

注8 ノスタルジイ Ⅱ 古いものをなつかしむ気持ち

注9 ケースバイケース Ⅱ 場合による

注10 ノウハウ Ⅱ 技術や方法

Ⅰ——線①「まったく同じである」とありますが、何と何が「同じ」だといっていますか。ふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア 本を作る側と読者

イ 読書による疑似体験と現実の体験

ウ 一冊の書物を書く労力と大量の本を作る労力

エ 疑似体験の楽しみと作る側のメリット

オ ゲームが広がった要因と書物普及の理由

- 2 — 線② 『疑似体験』の文化」とありますが、この文化の特徴としてふさわしくないものを次の中から二つ選び、記号で書きなさい。
- ア 破格のリアリティが実現できる。
- イ 現実世界の体験をその中に取り込める。
- ウ 製品が安く出回るので、大衆に流布する。
- エ リスクがなく本当に面白い部分だけ楽しめる。
- オ 本質的に異なる技術による商品が次々と誕生する。

- 3 — 線③ 「さて、失われたものとは、何か？」とありますが、筆者は何が失われたと考えていますか。次の（ ）にあてはまるかたちにして、四十字以内で書きなさい。その際、「現場」ということは必ず用いること。
- （ ）が失われた。

(下書き用)

が失われた。					

32

- 4 — 線④ 「もっと身近な例」とありますが、何の例を挙げていると考えられますか。ふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

- ア 昔の電化製品の例
- イ 現実の疑似的な体験をする例
- ウ 安いものがそれまでのものにとって代わった例
- エ 技術革新で古い機構が失われる例
- オ 既存の文化に親しんでいる人がいる例

5 —線⑤「窓の代わりに液晶モニタを壁に取り付けておけば良いではないか」とありますが、この考えに対して、筆者はどのような意見を持っていますか。ふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア 「窓」という技術的に面倒なものがなくなっただけよい。

イ 「窓」という既存の文化自体がなくなるのはさみしいことだ。

ウ 「窓」は古い文化なので、新しい技術によってなくなるべきだ。

エ 「窓」の代用ができたとして、文化以外にもなくなるものがある。

オ 一見代わられるように見えても、「窓」の役割を果たすものは存在しない。

6 ⑥ にあてはまる言葉としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア 大手を振って

イ 苦笑いして

ウ 眉を顰めて

エ 歯を食いしばって

オ 鼻を伸ばして

7 —線⑦「その核心」とありますが、どういうことの「核心」ですか。ふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア 「あの人に頼めば、なんとかなるだろう」といったように、誰かから信頼を得るといふ人間性

イ 古い機構の経験の中で培われた、疑似体験の中では決して起こらないような問題に対処する能力

ウ 技術の現場でのちょっとした問題が成功への大きな障害につながる可能性

エ 窓にはガラスやブラインドがあり、それを開け閉めするという文化の必要性

オ レールさえあれば軽くスライドし、正確な寸法に作れば水は漏れないという技術力

(問題はこれで終わりです)